

## ソーシャルビジネス推進イニシアティブ全体会（第4回）

日時：平成21年12月17日（木）16：00～18：00

会場：経済産業省本館17階第一特別会議室

出席者：（委員）中村委員（座長）、鈴木委員、関委員、谷口委員、濱口委員、原田委員、藤田委員、宮城委員（御欠席：川北委員、前田委員）

（地域協議会）河西委員（代理吉岡氏）、加藤委員（代理渡辺氏）、永沢委員（代理伊藤氏）、関戸委員、山田委員（代理堀野氏）、中村（隆）委員、藤目委員、田村委員（代理伊佐氏）、小野寺委員

（オブザーバー）経済産業省：米倉審議官、野田課長、飯野課長補佐、日本商工会議所、内閣官房、内閣府、総務省、厚生労働省、農林水産省、国土交通省、環境省（御欠席：全国商工会連合会、全国中小企業団体中央会、文部科学省）

（事務局）町野事務局長、服部、西山、齊藤、飯石、桑原、福沢（文責）

### 議事要旨：

（1）平成21年度ソーシャルビジネス推進イニシアティブならびに地域CB/SB推進協議会活動報告

（ソシオエンジンより、資料1に基づき活動報告）

（2）全国規模のソーシャルビジネス推進に関する基本的考え方について

- ・SBというものが多様な形で芽を出し始めているが、SB事業者が求めていることは、先駆者の経験談や克服点を知ること。また、SB事業者だけでなく、専門家や地域協議会の経験や知恵にもつながることが必要であり、事業基盤強化委員会では、SB事業者をはじめ、様々なセクター等からも参画していただく全国的なネットワークをつくり、SBの事業基盤が強化されていくことを目指したいということで議論を進めている。
- ・SBに対する社会的な要請は高まっている。また、担い手として取り組みたいという潜在的な要求は非常に高まっているという実感がある一方で、彼らが育っていく基盤が国内に整っていない状況にある。人材育成専門委員会では、担い手を増やすことと、育てていく基盤をつくるというところにフォーカスして議論している。担い手増加については、学生やシニアに対する啓蒙や地域の中小企業の学びの機会も必要だろうという意見がある。一方で、大学をはじめとした教育機関の中で、将来的に担い手となる人を育てていく基盤をどうつくっていくかが広義の論点である。実践の現場や地域の様々なステークホルダーと連携しながら育てていく視点が必要なのではないかという議論になっている。
- ・国際連携分野に関しては輸入超過の状態が続いており、日本のSBの展開について海外への発信が少ない。アジアなど今後連携していく地域に対しては、コミュニティレベルでの活動は海外にも注目されてしかるべきであり、役立つ情報も多々あるので、海外への情報発信を意識したほうがよいのではないかという議論が出ている。地域協議会に協力をいただきながら、海外への発信を意識したいと思っている。
- ・普及啓発WGでは、映像メディアの活用について検討している他、ネットワーク（シナジー効果）に

ついて検討している。ESGは来年が元年とも言われているので、NGO・NPOや政府だけでなく、企業も環境に合わせてソーシャルをかなり意識している。日経GSRプロジェクトでは、企業が世界の貧困や環境への取り組みを研究しており、かつ、NGO・NPOや社会起業家といかにネットワークしていくかを研究している。普及啓発WGも閉鎖的ではなく、外部に共通する、ソーシャルに関心のあるアクターにつなげて育成のエネルギーにしていくかをこれから考えていきたい。

- ・それぞれの地域の特色や発展段階に合わせながら自立化を検討していく軸を持つという、現実的で取り組みやすい形での提案になっている。2月までにまずは自立化計画を取りまとめるため各地域で検討している。取りまとめの後で変更になることもあるかもしれないが、まずはチャレンジしてみようというところである。
- ・日本経団連の社会貢献委員会が実施した、企業の社会貢献の実態調査結果では、寄付自体は全体として減っているが、逆に企業のリソースをうまく生かし、創意工夫をした社会貢献プログラムにシフトしてきており、自社の事業と密接に絡んだところで何かやろう、地域やNPOとの連携、協働も非常に増えてきている。何かやる時には、企業のCSRの動向を意識して連携をとっていくと、スケールアップできるのではと思う。また、来年、ISO26000社会的責任の規格が出てくるが、これは企業に社会的責任を浸透させるものであり、その動きとSBを関連付けられればよいと思う。
- ・最近、若い世代に大学で教えられなくても多様な人材が育っており頼もしく感じている。同時に、大学や大学院とはどのように連携をとっていくのか、どのように育てるのか、という視点が求められる。現場で育つことは大切だが、大学がどういう立ち位置で人材育成に関わっていくのかを考える必要がある。SBは新しい分野なので大学の先生自身が認識不足のこともあると思われる。
- ・現場での実践が伴わないと上手くいかないと思われるため、大学では講座を提供しつつ、ネットワークを活かしたインターンシップや現場ツアーなどをできればよいのではないかと考えている。現場と行きつ戻りつ進められれば、研究者も現場もお互いフィードバックできるので可能性としてはありうるかと思う。
- ・人材育成のノウハウ移転事業として、九州の大学と中間支援組織と一緒に、人材育成のプログラムを形にしていきながら、九州SBネットワーク大学ができればよいと思い、相談しているところである。コンソーシアム組織による有機的、生態系的な人材育成プログラムが進められるのではないかと考えている。
- ・大都市、大企業を中心とした従来の経済システムとは全く違う、地域から新しい事業が起こることを期待している。地方では、第一産業やものづくり、加工技術につながりながら新しいソーシャルビジネスが生まれてくると思うが、地域の現業でやっている人たちの知恵とどうつながるか、本気で議論されていかないとそれ以外は空疎になってしまう懸念がある。SBを日本社会に根付かせていくのであれば現業との関わりは絶えず忘れずにやっていく必要があるかと思う。
- ・現場の声だけではなく、先駆者に実際に接すると、社会起業家の方々はこれまでの起業家人材とは全く異なる特性をもっていると感じる。そういう優れた方々が若い世代と直接接することができるということは強いメッセージになるので、こういう場をもっと増やしてほしい。私は運営委員会に出ているが、一つの専門委員会に出ているだけでは分からない。現場に起きている問題を伝える意味では参考になる意見が出せると考えている。
- ・地域協議会では輸出超過という感覚をもっている。全国レベルでネットワークしていくことの意味、

その優先課題についてつめていく必要があると思う。例えば、普及啓発の映像は全国の力を持ってより効果が上がることであり、地域にとっては輸入させてもらえる材料かと思う。全国でネットワークする意味が本当にあるように、地域協議会の力では及ばないことを全国で果たしてほしいと期待する。現実には取捨選択をしなくてはならないので、そこでは輸出入のバランスがとれるように絞り込んでいただきたいと思う。

- ・人材育成を大学で担当することはもう手遅れではないかと思っている。地域では第一産業やものづくりが重要という意見があったが、地域の現状をみると、そういう優秀なものが地域から出て行ってしまっている。地域の大切さを伝えるような、地域の教育力が劣ってきているので、コミュニティや地域教育を復活する必要がある。
- ・1月に伊是名島で研修会を行った際に、藤田委員から「少しずつ積み重ねれば実現できる」という話を聞いたが、沖縄はビジネスの規模が小さいという印象がある中で、地域には一次産業の宝庫がたくさんあることに改めて気づき、その積み重ねが力になるという話に触れて、意を強くした。

### (3) イニシアティブの来年度以降の展開について

- ・S B事業者は事業者ネットワーク(仮)の部分はメンバーも集まってきていると思うが、経団連や商工会議所との関係はどうか、摸索中であろう。支援機関の役割はかなり重要になるため、彼らを絡めたネットワークづくりが重要だと思う。
- ・中間支援機関の方々にはこの場にも参画していただいているので、イニシアティブの後継のベースとして入っている。対海外との関係や国内での関係においても、大きな力にしていくため力を集結する場づくりが必要かと思う。ヒエラルキー組織でまとまる必要はなく、自立分散型で有機的につながっていけるようなネットワークにできればよいと思っている。
- ・それぞれの事業者が現場を抱える中でどの程度身を預けるか判断をする際の材料としては、きちんとした場や組織が立ち上がっている、立ち上げていくのかが見えている必要がある。その意味でネットワークをつくっていこうという提案まではなっており、組織や事務局については、今後具体化することに決めている。
- ・北京の社会起業家の会合では、S B事業者や研究者、企業経営者に加え、金融機関の代表者が参加するなど多様な主体が参加していた。組織イメージの中に金融機関と描いてあるが、金融機関がS Bに対する関わりが必要かと思う。
- ・企業セクターとS B事業者の部分にインキュベーションと事業創出と書いてあるが、これは一例に過ぎないと思う。企業がソーシャルエンタープライズ化することもあるし、企業が金融を提供することもある。また人材供給もあるし、つながり方は多様だと思う。経団連の社会貢献委員会ではS Bに関心をもっており、勉強会もしている。どういつながりになるかまだ可能性はわからないが、つながりをもってることが大切である。顧客になることもあるし、融資元になることもあるし、人材提供元となる可能性もあるので、ここに位置づけられていること自体が大切だと思う。
- ・アメリカの場合、アキュメン・ファンドやエンデバーなどがあるが、日本でもファンドが興味のあるところがあるので、巻き込んでいったほうがよい。
- ・金融機関は大事なプレーヤーだと思う。資金調達の機能は、全国と地域という関係性の中でも大事な機能になるかもしれないと思う。公共と事業者、民間のみで資金調達の仕組みをどうしていくかも大

切だと思っている。都銀や地銀、信金など金融機関との関係性は大切であり、投資信託型のファンドを日本でも根付かせることが大切かと思う。

- ・12月11日に地域における資金循環を考えるシンポジウムとして、地元信金やベンチャーファンドなど金融のプロをパネリストとして実施したところ、80名のうち8割程度が金融機関だった。ソーシャルファイナンスを知りたい、SBの実態を知りたい、金融機関の社会的な役割を知りたいというニーズはあり、一緒に考えていける土壌ができてきたと思う。地域協議会では信金を中心に地域における資金循環を考えるが、メガバンクなどは全国組織で巻き込みを図ってもらいたい。
- ・メガバンクはまだこれからだが、信金や非営利金融は動きがでてきており、マイクロファイナンスの著作物も増えている。環境は大分整ってきているので、金融の巻き込みは全国の役割の一つとして捉えていきたい。

(4) 関係府省におけるSB振興に資する施策の紹介 非公開

(5) その他

- ・基本的には賛同をいただけたかと思う。運営委員会や地域協議会とのやり取りの中で詰めていきたいと思っているので、引き続きご協力をお願いしたい。
- ・次回第5回は2月24日(水)16~18時に予定している。

3. 閉会

以上